（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　石上和敬

インドにおいて四、五世紀には成立していた大乗経典の悲華経は、阿弥陀仏をはじめとする諸仏が穢土を離れて浄土における救済を勧め、諸仏の釈迦仏への優位を主張するのとまったく対照的に、穢土の完成を誓う釈迦仏の諸仏の浄土に対する優位性を説く、インド浄土教思想史上きわめて特異な経典である。本論文は悲華経の中心的な教説である「五百誓願」を解明の主題とし、サンスクリット写本、チベット語訳、二種の漢訳の精緻な解読にもとづき、その教説の構造と思想的特色とを詳細に分析し、それらの成果を広く渉猟した仏教文献のなかに据えなおすことによって、悲華経のインド仏教史上における位置づけを明確に与えた画期的業績である。

論文は「五百誓願」にふくまれた諸概念の思想史的意義を解明し仏教史上に位置づける〔本論〕と、本論の基礎となる諸テクストを文献学的に分析し批判的校訂に限りなく近いテクストおよび和訳として提示する〔資料編〕とからなる。

〔本論〕第一章は悲華経の基礎テクストとなるサンスクリット、チベット、漢語の諸資料の扱いを綿密に検討して、サンスクリット写本の特異な系統の析出に成功し、四十年にわたって底本とされてきた山田一止校訂本改訂への可能性を大きく開いた。〔本論〕の圧巻である第二章「釈迦如来五百誓願の研究」は、仏伝における一般的理解に逆行する「釈迦の苦行の積極的評価」や「他者に代わる自己犠牲的苦行（代受苦）に秘められた利他力の顕彰」、さらに「他者に向けた教説の一元性と多様性の相即的関係（一音説法）の主張」、「入滅時の唯一の仏の身体の拡散と分配の意義の宣揚」など、他経典に類例をみない教説の意義を取り上げて分析し、それらを厖大な関連文献と照合することによって本経典の仏教史における位置づけを明かした。つづく第三章は、Sukhāvatīvyūha を中心とする諸浄土経典と本経典との関連を明かし、古形をたもつ大阿弥陀経との関係に注目することによって、悲華経が中期 Sukhāvatīvyūha から発展したという、全くあらたな可能性を示した。〔資料編〕において石上氏は、14 本のサンスクリット写本、11 本のチベット語訳写本・版本、9 本の漢語訳写本・版本を照合して正確なテクストを提示するとともに、このうえなく詳細な文献学的注を施しつつ明解な和訳を示した。

浄土思想を説く経典にかんする従来の研究は、法然によって選別され親鸞に受け継がれた、いわゆる「浄土三部経」にのみ解明の関心が偏っていた。本論文はこの積年の傾向からまったく自由になり、穢土を尊重する悲華経編纂の意義を解明することによって、浄土思想のもつ、これまで見えなかった深い奥ゆきを示すことに成功した。ときに論述があまりに慎重すぎるため主張の筋が見えにくくなる点など、いまだ改善の余地はあるものの、本論文が大乗経典研究になした貢献はきわめて大きい。本審査委員会は本論文に対し、博士学位（甲）を授与するに価するものと判断する。